
江戸女人氣質

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸女人気質

【Nコード】

N6662K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

かがりは男まさりの娘。そんな彼女が結婚することになったが、江戸時代の恋愛ものです。ヒロインのモデルは戦国サイバー藤丸地獄変のキャラクターです。

第一章

江戸女人恋道

花のお江戸は今日も日本晴れであつた。しかしである。

今日も今日とて喧嘩の音が絶えない。まさに火事と喧嘩は江戸の華である。

しかしどうもこの喧嘩は勝手が違つていた。女の声も混ざつているのだ。

「そつだよ、悪いのかよ」

「手前がぶつかつて来てその言い草は何だ!？」

「ふざけてんじゃねえぞ」

鬚をわざと傾かせてガニ股になつてゐる如何にもガラの悪い連中が相手につつかかつていた。

「それでその言い草だとな」

「痛い目見るぜ、おい」

「痛い目だつて!？」

相手は女の声だつた。しかもかなり若い。まだ娘と言つていい年頃の声である。

「あたしにそれをしようつていうのかい」

「ああ、そつだよ」

「そつかい、よくわかつたよ」

見れば髪を短く切つて後ろで束ね鬚の様にして赤と白の上着に藤色の袴を着ている。女とはとても思えない様な格好をしている。背は小柄である。

ところが顔立ちは凜々しさもあることにはあるが整つていて目も眉も綺麗なものである。唇は紅で頬は白い。そんな女が今ごろつき達と対していた。

その娘がだ。ごろつき達に対して言うのであつた。

「じゃあかかつて来るんだね」

「おい、この女」

「俺達とやろうつてのか？」

「まさか」

「そのまさかだよ」

また女の方から言ってきた。

「喧嘩でも何でも来な。相手してやるからよ」

「面白い、それだったらな」

「今ここでぎったんぎったんにしてやるぜ」

「もう謝っても許さねえからな」

こう言つて挑みかかる。しかしであつた。

まず最初の一人がそのみぞおちに拳を受ける。男はそれでうずくまつてしまった。

「うぐっ……」

そして二人目は足払いを受けた。女があつという間に前に出て払つたのだ。その男はそれを受けてあえなくこけてしまったのだつた。三人目は背負い投げを決められた。まさに瞬く間にである。三人の男達はあつという間に女一人にのされてしまったのである。

「おいおい、あつという間か？」

「大の男三人が女一人にかよ」

「情ねえな」

まずはそのごろつき達が見物客達に馬鹿にされた。喧騒を聞いてそれで集まつて来た野次馬達である。こうした連中は何時の時代でもある。

そしてその彼等はだ。今度は娘を見て言つのだつた。

「しかしあの娘な」

「ああ」

「かなりやるんじゃないか？」

「なあ」

こう話す。次はその強さを話すのだつた。

「動きもいいし強いしな」

「とてもな」

「洒落にならないな」

「あつ、そういえばあの娘」

ここで見物客達のうちの一人が気付いた。

「確か」

「あれっ、あんたあの娘知ってるのかい？」

「ひよつとして」

「梅井家の末娘だぜ」

その客がこう周りに話すのだった。

「確かな」

「梅井家っていうとあの旗本のか？」

「五千石のあの」

「あの家だよな」

「ああ、あの家だよ」

梅井家のことは江戸の誰もが知っていた。五千石の大旗本であり幕府においても大目付を務めている重鎮である。その家の末娘だといふのだ。

「あの家の娘だよ」

「つていうとかなりいいところのお姫様じゃねえか」

「だよな。何でそんな家の娘があんなことしてるんだ？」

「それがな」

ここでその娘について話す男は顔を顰めさせるのだった。

「とんでもないじゃじゃ馬でな」

「それであんなことしてるのか」

「それでか」

「ああ、それでなんだよ」

彼はこう話すのだった。

「子供の頃から馬に剣術に柔術につてな。そんな男のやることばかりしてるらしい」

「おいおい、女だてらに兵法をやってるのかよ」

「それで強いのかよ」

「ああ、それものかなりのものらしい」
その娘について話される。

第二章

「水術もやれば弓も鉄砲だつてな」

「武芸十八般かよ」

「この泰平の御時世にかよ」

「またえらく変わり者だな」

「梅井家もかなり困つてゐるらしいぜ」

娘について話される。

「相当な」

「困つた話だな、見たら顔はかなりいいのにな」

「ああ、もう嫁にいく歳だろ？それであれか」

「頭が痛いんだろうな」

「実際にそうらしいな」

このことも知つてゐるのだつた。話す男は。

「梅井家の男姫殿さ」

最後にそんな仇名まで言われた。後にはうずくまる男達がいた。

娘の一撃がまだ効いていたのだ。娘は何時の間にか姿を消していた。

梅井家は武家屋敷が連なるその中でとりわけ大きな姿を見せていた。門構えもその内装もかなり立派なものであり庭も広く見事なものである。池の中の錦鯉達も大きくその中で泳いでいる。今その鯉達に厳しい立派な顔立ちで姿勢のいい男が餌をやつていた。

服は質素なものであるが仕立ては奇麗なものだつた。その格好で餌をやりながら後ろにいる女に対して話していた。

「ではかがりはまたか」

「はい、またでございます」

女もまた厳しい顔をしていた。顔はあの娘に生き写しであるがその服は武家の女のものであり髪もそうである。その女が彼に言うのである。

「また町のごろつき達をです」

「やれやれだな」

男はそれを聞いてさらに言った。

「あいつだけはどうしようもないか」

「口を酸っぱくして言っているのですが」

「それでもだな」

「はい、困ったことにです」

そうだというのである。

「また喧嘩をしてそれでなのです」

「三人をのしてしまいました」

「今度は三人か」

「瞬く間にです」

「相変わらずだな、あいつは」

「どうしましょうか」

女は男に対して尋ねた。

「かがりは今日は」

「言ったところで聞くかどうか」

「それはありません」

それは二人もわかっていた。嫌になる程である。

「困ったことに」

「本当にな。何であんな娘になったのか」

「全くです」

そんな話をしているとであった。不意にあの娘が二人の後ろにある屋敷の廊下に現れた。娘は障子を背にしてそのうえで廊下を進んできていた。白い障子の前にその勇姿を見せている。

「あつ、父上母上」

その二人に顔を向けて告げた。

「こちらにおられたのですか」

明るい顔で二人を見ての言葉であった。

「こちらではない」

「そうですよ、全く」

両親は彼女に怒った顔を向けて答えた。

「聞いたぞ、また喧嘩をしたそうだな」

「それも町人のごろつきと」

「向こうから絡んできたのです」

その娘かがりは平然と答えた。

「だからなのですよ」

「それでもだ。娘が喧嘩などとは」

「ましてや武家の娘が」

「いいではありませんか」

しかしかがりは両親に言われても平然としたままであった。そしてまた言うのであった。

第三章

「私は自分から喧嘩は売りませんし」

「そんなことを言っているのではないっ」

「そうですよ」

両親はさらに怒った。

「全く。御前もだな、そろそろ嫁に行くことを考えてだな」

「もう十六ですよ」

この時代ではもう嫁に行く歳である。しかし当のかりはというと。

「私は嫁になぞ行きませんよ」

楽しそうに笑ってこう言うのであった。

「自分より強い殿方以外には」

「またそんなことを言うのか」

「いい加減にしなさい」

両親はすぐに彼女の今の言葉を叱った。

「全く。嫁にも行かないでそんなことをしてだ」

「何を考えているのよ」

「ですから私は武家の娘です」

ここでまた胸を張って話す。

「武家の娘だからこそ武を窮めなくて何だというのですか」

「戦国の世でもあるまいしそんな理屈があるか」

父はまた彼女を叱った。

「ふざけたことばかり言う」

「別にふざけてないですよ」

「いいや、ふざけているようにしか聞こえん」

また言うのであった。

「そんなことで権現様の祖父殿清忠様から公方様の御家を守りしてきた梅井家のだな」

「ですから。武をですね」

「どうしてそんなに我が侬を言うのだ」

父も母もこんな調子でいつも叱っていたが彼女は相変わらずであった。道場にばかり通って町中で絡んできたごろつき達をのす毎日だった。その腕は確かなもので剣術も柔術も弓術も免許皆伝となつた。馬術に水術も相当な域にまで達したのである。

そんな彼女のことは江戸中で評判になっていた。そうして『梅井の殿様の男姫』として町を歩けばそう言われる日々を過ごすようになっていた。

そんな彼女の趣味の一つに道場破りがあつた。とにかく滅法強く闘えば勝つ、それで今日も江戸のある道場の門をくぐるのであつた。「頼もう!」

こつ門のところで叫んだ。門は大きいが質素なものである。そこから見えるその中也広いが実に質素で質実剛健なものをそこに見せている。

その入り口で叫んだ。人を呼ぶのであつた。

「誰かおられぬか!」

「何か」

出て来たのは若い男であつた。長身だが細面であり白い顔をしている。眉は細く目も涼しげで何処かなよとした感じを受ける男であつた。服は藍染めの質素な上着と袴である。それが実に道場の人間らしく見える。しかしそう見えるのはあくまでその服だけだった。

その男が出て来てだ。そのうえで彼女に対してきたのである。

「御用でしょうか」

「勝負しに参つた」

その男にこう返したのである。

「誰かおられぬか」

「それでは拙者でよければ」

男は述べてきた。

「それで宜しいでしょうか」

「門人はおられぬのですか？」

「はい、今二十人程来ていますが」

このことも答える彼女だった。

「ですが。貴女のことは御聞きしていますので」

「私のことを御存知なのですね」

「梅井の家のかかり様ですね」

「そうです」

その問いにはっきりと答えた。

「その通りです」

「それでは門人では相手になりません」

男は笑ってこう話した。

「ですから私が御相手しましょう」

「それで宜しいのですか？」

かかりはこう彼に返した。

第四章

「貴方が御相手で」

「はい、私で宜しければ」

穏やかな笑みで返す彼だった。

「それでいいでしょうか」

「わかりました」

それに応えるかがりだった。

「それでは宜しく御願います」

「はい、それでは」

こうしてかがりはその男と勝負することになった。すぐに道場に入り防具を身に着けた。そして竹刀を持ちそのうえで相對する。構えてみるとすぐにわかった。

「強い……」

自分の前にいる男を見て呟いた。

「この男、かなりの」

その額に汗が出る。ごくりと唾を飲み込む。怖気付くのも久し振りのことだった。それでも何とか打とうと前に出たがその時だった。一瞬だった。

面を打たれてしまった。これで終わりであった。あっという間に一本取られてしまった。

「な……」

「一本ですね」

彼はその一本を取ってから述べてきた。

「これで」

「免許皆伝を取ってからはじめです」

かがりは感嘆した様に述べた。

「まさか。こんな」

「そうだったのですか」

「そういえば御名前を聞いていなかったですね」

かがりは面を着けたままで彼にまた問うた。

「何と仰るのですか？」

「深田実光」

彼は一言で名乗った。

「それが私の名前です」

「深田殿ですね」

「はい、それが私の名前です」

また名乗る彼だった。

「この道場の主をしております」

「わかりました、深田殿ですね」

すぐにその名前を頭の中に入れた。かがりは武芸だけでなく頭も冴えていた。だがこの冴えは世間からはあまり注目されてはいないものであった。

「覚えておきます」

「はい、それではまた」

「来ますので」

微笑んでこう述べた。これが二人の出会いだった。

かがりはそれから毎日の様に深田に挑んだ。剣術だけでなく柔術や弓術、馬術でもだ。兵法も論じてみたがこれでも適わなかった。まさに彼女よりも上であった。

それでも彼女は挑み続けていた。武芸の鍛錬はさらに激しいものになっていったがそれ以上に彼の道場に足しげく通うようになっていた。家の者はそれを見て言うのだった。

「最近のかがりはどうしたのだ？」

「さて、あれは」

「どうしたのでしょうか」

両親だけでなく兄達も首を傾げる。姉達はもうそれぞれ嫁に行っている。兄達も妻を迎えている。家にとって最後の厄介ごとが彼女のことだったのだ。

「最近はある道場に通つてばかりで」

「何でも物凄く強い道場だとか」

「また道場破りでもしているのか？」

父はまず是这样考えた。

「全く。飽きもせず」

「何か随分と強い道場でして」

「かがりを負かしたそうです」

「何っ!？」

父はそれを聞いて思わず声をあげた。実は彼も最近では娘と稽古をしてみて勝つたためしがない。それは兄達も同じであつた。それどころか江戸で彼女に勝てる男なぞいないとさえ言われていたのだ。おかげで巴御前だのそんな風にも言われていたのである。

「あのかがりをか」

「はい、そうだとか」

「何でも」

「それはまことか」

父はそのことに驚きを隠せなかつた。日頃武士は感情を顔に出すものではないと言っているその彼がである。そうなつてしまつていた。

第五章

「何ということだ」

「驚くべきことです」

「何でもそうとか」

「世の中にその様な者がいたのか」

あらためてこんなことを言う彼だった。

「恐ろしいことだ」

「それでなのです」

「かがりはその男の道場に毎日通い勝負を挑んでいるとか」

「それはあ奴らしいな」

娘のそうした気性をわかつての言葉である。

「しかしじゃ。それでも」

「あのかがりの方が負けるとは」

「一人であろうとも十人のごろつきを木刀一本で倒したこともあったというのに」

そこまで強いのである。だから江戸中で評判になっているのだ。

「そのかがりをです」

「恐ろしい男がいるものだ」

父はここまで話を聞いて思わず腕を組んでそのうえで唸った。

「それこそ素手で熊を倒せそうなおなごなのにな」

「ええ。つまりその相手はです」

「まさに虎です」

「いや、龍では」

兄達も妹をかなり言う。実際のところ彼等も長男は家督を継ぐことになっていて次男と三男は養子に入っている。今日のかがりのことで話し合いに呼ばれてそれで両親と共に彼女のことについて話しているのである。

「それだけの男がいるとは」

「恐ろしい話ではありません」

「全くです」

ここで母が言った。

「しかしです」

「しかし。何だ」

「これはいいことかも知れませんよ」

こう自分の夫に話すのである。

「かがりにとつても我が家にとつても」

「何故だ、それは」

「ですから。かがりはいつも言っていたではありませんか」

娘がかつて言っていたことをここで出すのである。

「自分より強い殿方の嫁になると」

「その話か」

「はい、そうです」

「そういえばそんなことを言っていたな」

そのことを思い出して夫も頷くのだった。

「確かな」

「ではその殿方と」

「いや、待て」

しかしであつた。父はここでそれを制止するのだった。

「すぐに決めるのはよくない」

「左様ですか」

「あれはそう簡単には動かんおなごだ」

娘のことであるのは言うまでもない。

「それこそこちらから何を言ってもな」

「強情な娘なのはわかっていますが」

「そうじゃ。そうはいかん」

また言う彼だった。

「簡単にはな」

「ではどうされますか？」

「暫くはあれに任せておく」
そうするというのである。

「暫くはな」

「そうですね。それでは」

「様子見ですね」

「今のところは」

息子達も父に対して問うのであった。

「ではその様子に」

「しますか」

「うむ、今はそうする」

父はこう決断を下した。

「それでいいな」

「わかりました。それでは」

「その様に」

こうして家の中での話は決まった。彼等は暫くかがりの様子を見ることにした。かがりは道場に足繁く通いそして負け続けていた。だが彼女はそれでも通い。負けても負けても彼に勝負を挑みそうして二人の時間を過ごすのだった。

第六章

その中において。彼女はある時投げられて起き上がったから言うのだった。今は柔術の稽古をしていた。周りには深田の門弟達がい

た。

「参りました」

「動きが凄くよくなっていますね」

「そうですね」

起き上がったところで彼の言葉に答える。

「動きが」

「はい、よくなっています」

また言う彼であった。江戸でその強さを知られたかがりを寄せ付けないとは思えないまでに穏やかで優しい微笑みを浮かべていた。

「今まではです」

「今までは」

「何か勢いで突進し向かって来る相手を叩きのめすものでした」

「それが違ってきているのですが」

「流れるようなものになっています」

そうなってきたと。かがり自身に話すのである。

「自然に従いそのうえで、です」

「そうですね」

「御自分ではまだ気付いておられないだけです」

それだけだというのだ。

「ですが」

「変わってきているのですね」

「はい」

その穏やかな笑みはそのままである。

「そうなっています。ですから動きが自然になってきています」

「そうですね」

「はい、それでなのですが」

「それで？」

「お腹が空きませんか」

こんなことを言ってきたのであった。

「そろそろお昼にしましょう」

「お弁当なら持って来ていますか」

「いえ、かなり身体を動かしましたので」

「他にもですか」

「はい、味噌汁を作っておきました」

それとだというのだ。

「それを食べましょう」

「お味噌汁ですか」

「門弟達を持つて来てくれたものでして」

「この方々がなのですね」

「そうです」

彼等の方を振り向いたかがりに対して答えた。

「それと家の畑で採れた野菜も入れまして」

「何か美味しそうですね」

「ええ、いいものですよ」

武士にしても家で畑を持っていたりした。実際のところ武士というものは殆どが貧しかった。内職に励まざるを得ない武士なぞ珍しくはなかった。実際のところかがりの家である梅井家にしても五千石と聞こえはいいがそれでも内情は質素儉約に五月蠅く苦勞に苦勞を重ねているのである。これは大名家はおるか將軍家ですら同じなのだった。江戸幕府はその強固な統治組織とは見事に反比例して極めて脆弱な財政基盤であった。

「ですから。それもどうでしょうか」

「そうですね。宜しければ」

「御一緒に頂けますね」

「喜んで」

満面の笑顔で答えるかがりだった。その笑顔はまさに天真爛漫な少女のものだった。

「御願います」

「はい、それでは」

こうして彼女はその味噌汁も御馳走になった。そんな日々を過ごしていた。そうして一緒に過ごすうちにだ。何時しか彼にこんなことを言うのであった。

今度は弓術を競っていた。深田の道場にはそうした場所もあるのだ。そこでそれぞれの的を射ながら深田に対して話したのである。

「深田殿」

「何でしょうか」

深田は彼女の言葉を聞きながら弓を引いていた。目は的をじっと見据えている。それはかがりも同じであり一緒にしているのだった。

「私は以前考えていたことがあります」

「それは一体？」

「私から一本取ることができた殿方の嫁に入ろうと思っていました」そのことを言っただ。

「そう考えていました」

「そうだったのですか」

「しかし今は違います」

ここでまた話した。

第七章

「深田殿は私から一本取りましたね」

「そのことですか」

「はい、そのことです」

こう彼に話していく。弓をさらに引き絞っていく。今まさにそれを放たんとしていた。

「それで考えが変わったのです」

「それでは今はどの様に御考えなのですか？」

「深田殿から一本取りたいのです」

全く逆であつた。それを告げたのだ。

「それで宜しいでしょうか」

「私から一本ですか」

「深田殿は二十歳になられますね」

「そうです」

年齢のことを尋ねられて素直に答える。

「今年でそうなります」

「奥方もおられませんね」

「残念ながらまだ一人もいません」

このことも素直に答えた。実はかがりの父も妻は一人だ。やはり五千石でも妾を持つ様な余裕がないのである。やはり何かと台所事情が苦しいのだ。

「それが何か」

「私は十六です」

かがりは今度は彼女の年齢を話した。

「年齢は釣り合っています」

「それはそうですね」

「では約束して下さい」

きつとした顔になって深田に告げてきた。

「若し私が一本取ったその時は」

「どうされるといいうのですか？」

「結婚して下さい」

こう言うのである。

「それでいいですね」

「結婚ですか」

「お互い武門の家として。いいではないですか」

「はあ。そうですか」

それを聞いた深田は少し戸惑った。しかし首を傾げさせてそれを元に戻してからかがりのその問いに対して答えたのであった。その答えは。

「一本ですね」

「それでいいですね」

「わかりました。それでは」

こうしてであった。かがりはまず深田から一本取るころになった。だが問題は何で一本取るかということである。そして彼女が選んだそれは。

「馬で御願います」

「馬ですか」

「はい、馬で」

馬術であった。それを選んだのである。すぐに馬を用意してそのうえで走りだす。江戸を少し出てそれで道を走っていくのであった。かがりはこれまでになく馬を飛ばした。その速さはかなりのもので彼女にしては最高の速さであった。だがそれでもなのだった。

深田はその横についてきていた。そして彼女の馬を追い抜いた。かがりのことをよく知っている江戸の町民達は見物に来ていたがそれを見て啞然となった。

「おいおい、男姫を抜くか」

「今度もかい」

「相変わらずやるねえ」

町民達の中には武士達もいる。だがその彼等もまた驚きを隠せなかった。

「凄いものだな」

「全くだ」

「あの馬術はな」

「かがり殿の馬術も見事なのだが」

それも認められる。しかしであった。

深田の馬術はそれ以上であった。彼はかがりのそれをあっさりと抜いてである。そのまま駆け去つていこうとさえしていたのである。これで勝負あった、誰もがそう思った。

「また勝つたな、こりゃ」

「ああ、決まりだろ」

「あんなに開いてたらな」

町民達はこう見ていた。しかしである。

かがりも伊達に男姫などと呼ばれているわけではない。彼女にも意地があつた。

「このままでは負けていられない」

馬の手綱を握りながらきつとした顔になる。前には深田とその馬がいる。

「それなら」

「おっ!？」

「どうなる!？」

ここで、であった。かがりの馬がいなかった。彼女は鞭は使わない。鞭を使って進ませるのは馬術においては下と教わったからだ。それよりも己の考えを伝えてそれでさらに速く進ませる、彼女はそうした馬術を教わり身に着けているのである。それを伝えたのだ。

第八章

馬がさらに速くなった。そうして見る見るうちにであった。

「おい、あの速さ！」

「あ、ああ！」

「何て速さなんだ！」

皆驚きを隠せなかった。何と彼女の馬はそれまでの倍は速くなり瞬く間に深田の馬に追いついた。そうして何とその馬を抜いたのである。

「抜いた！？」

「遂にか！」

江戸の町民達もこれには大いに驚いた。

「まさかここで」

「一気に」

「何てことだ」

それを見て口々に言う。そして驚く彼等をよそにだ。

終点に着いた。かがりの馬の方が先であった。彼女はそこを駆け去るここで思い切った声をあげて喜びを表したのであった。

「深田殿、これでいいですね！」

「はい、それでは」

少し遅れて深田の馬が来た。彼は汗だらけであり馬ははあはあと辛そうな息を出している。彼もまた全力を出したことは明らかであった。

「その様に」

「勝つてこそです」

かがりもまた顔中から汗を滴らせている。そうして肩で息をしている。しかしそれでも言うのであった。

「手に入れたいものは手に入ります」

こうして彼女は深田の家に嫁に入ることになった。だが彼の両親

達はどうにも苦い顔をして、またしても深刻な話し合いの場を設けていた。

「全く。馬で勝ってそれで婿を手に入れるなぞ」

「そうです」

「何といますか」

「それがおなごでしょうか」

父と兄達が口々に末妹のことを話した。

「そんなおなごなぞ」

「武家の娘ではありません」

「全くです」

「その通りだ」

まさにそうだという父であった。

「ここまでおなごではないとはな」

「確かにそうです」

「かがりにも困ったものです」

それぞれの家に嫁に入っている娘達もここで言う。

「あの娘は子供の頃から手がつけれませんでしたし」

「今もああして婿殿のところに入る等とは」

「ですが」

「そうですね」

しかしであった。ここで娘達はこんなことを言うのであった。

「かがりらしいですし」

「幸せならばそれでいいではありませんか」

「そうですね」

母も言った。

「あの娘もこれでやっと幸せになりましたし」

「あれで料理も裁縫もできますし」

「心配はいりませんわ」

「それにです」

ここで母はまた言うのであった。

「確かにああいう娘で困ったものでありますけれど」

「何だ？」

「かがりは幸せになれるのですよ」

こう夫と息子達に話すのである。

「ではそれでいいではありませんか」

「いいというのか」

「あの娘の白無垢姿を御覧になって下さい」

夫に対してまた告げる。

「そうすればわかりますわ」

「そういうものかな」

「そうです。では行きましょう」

こう夫だけでなく息子や娘達に対して告げた。

「今から。あの娘の晴れ舞台にね」

「そうだな。それではだ」

父が応えた。見れば皆婚禮の場の服である。実はこれからそのかがりと深田の婚禮に家中で出るのである。それぞれの妻や夫と共にである。無論深田の家も同じだ。

「行くとするか」

「はい、それでは」

こうして彼等はその婚禮の場に向かった。そしてそこで見たかがり的美丽な姿を見て納得したのであった。そこにいたのは紛れもなく幸せを手に入れた美しい娘であった。娘から妻になる、その瞬間の神々しいまでに幸せに包まれた彼女がそこにいたのである。

江戸女人恋道 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6662k/>

江戸女人気質

2010年10月8日15時22分発行